

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

【氏名】

清水佑輔

【所属】

東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】

自然と共に暮らす知恵を持つ高齢者：高齢者偏見の軽減を目指して

【研究の目的】

高齢者偏見は人種や性別に基づく偏見と並ぶ重要課題であり、高齢者は「時代遅れである」などの態度が広く一般に存在する。他世代の人々による高齢者偏見は、高齢者の精神的健康状態悪化の原因となるため、高齢者に対する態度の改善は喫緊の課題である。ところで、日本を含む世界中で環境破壊が急速に進行しているが、自然と人間との共生を目指すにあたり、我々が参照すべき身近な社会集団はどのような人々であろうか。それは、主に農村や漁村に居住する（していた）高齢者であると考えられる。本研究では「自然と人間との共生の『プロフェッショナル』である高齢者」という側面に着目して、高齢者偏見の軽減を目指す。研究1では、高齢者を対象に「自然との共生を通じて編み出した知恵」を幅広く調査する。研究2では、若者を対象に「多くの高齢者が健康に暮らしていること」を示す説明文を、研究3では「多くの高齢者が自然と上手に共生していること」を示す説明文をそれぞれ提示し、高齢者偏見が変容するか検討する。自然との共生について「高齢者から学ぶ」姿勢が、高齢者偏見の軽減につながると考えられる。

【研究の内容・方法】

研究1では、日本国内に居住する高齢者を対象に自然と人間との共生に関する知恵を幅広く調査した。オンライン調査を実施し、参加者は高齢者（65-85歳）218名であった。参加者は、自分が知っている「自然の恩恵の活用や自然の脅威への対策を通じて編み出した知恵」について自由記述形式で回答した。調査の結果、「冬の寒さ対策として、水道管の周りに凍結防止のタオルを巻く」などをはじめとする幅広い回答が得られた。その成果は The 13th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences (2023) で発表され、参加者の回答データを日本語で Open Science Framework (OSF) 上において公開した。

研究2では、日本国内に居住する若者を対象に「多くの高齢者が健康に暮らしていること」を示す説明文を提示し、高齢者に対する態度が変容するか検討した。オンライン実験を実施し、参加者は若者（18-39歳）1393名であった。参加者の半数は、高齢者と病気の間接的な結びつきを弱めるため、高齢者に関する説明文を読むという実験操作を受け（実験群）、残りの参加者は無関連の説明文を読んだ（統制群）。結果、実験群において統制群よりも高齢者に対する否定的な態度が軽減し、その効果は1週間程度持続した。

研究3では、日本国内に居住する若者を対象に「多くの高齢者が自然と上手に共生していること」を示す説明文を提示し、高齢者に対する態度が変容するか検討した。オンライン実験を実施し、参加者は若者（18-39歳）670名であった。参加者の半数は、高齢者と自然との共生に関する説明文を読むという実験操作を受け（実験群）、残りの参加者は無関連の説明文を読んだ（統制群）。結果、実験群において統制群よりも高齢者に対する否定的な態度が軽減したが、研究2の結果ほど大きな効果は見られなかった。今後の改善点として、高齢者が実際にどのように自然の恩恵を活用し、自然の脅威に立ち向かってきたかに関する具体的な記述を含む実験操作によって、再度同様の実験を行うといった工夫が求められる。

【結論・考察】

本研究では、高齢者偏見の軽減を目指して「高齢者が自然と人間との共生に関する知恵を数多く持っている」という特徴に着目した。本研究の参加者はオンライン調査に回答できる高齢者に限られているという限界点が

あるため、今後は郵送/訪問調査を用いて幅広い高齢者の回答を収集することが求められる。また、高齢者は病気と密接に結びついて認知されやすいという特徴を持っている。よって「多くの高齢者が健康に暮らしていること」や「自然と共生する多くの知恵を持っていること」を参加者に改めて教示し、高齢者イメージを変容することは有意義である。実験操作の効果がどの程度持続するのかについて、今後検討する必要があるだろう。

世界中で進行する高齢化および付随する社会問題について、先陣を切って経験しているのが日本である。日本の高齢者における自然との共生に関する知恵や日本の農村部で行われている取り組みは、海外の研究者にとっても非常に関心の高いテーマであろう。今後、本研究の成果を論文化して海外に発信することで、日本だけでなく世界の老年学・社会学領域に学術的に貢献できると考える。